
消えない流れ星

悲劇のM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消えない流れ星

【Nコード】

N2794G

【作者名】

悲劇のM

【あらすじ】

偶然見つけた2ちゃんねる創作文芸板の中の三題嚙スレで書かせていただいた作品です。字数制限が辛かったですが、そのまま投稿します

「まあ、急に降りださないでよ」

突然降りだした大雨に、私は一人で愚痴をこぼした。

でも、制服が濡れたら大変。私は急いで、近くにあった店の軒下に雨宿りさせてもらった。

生徒会の仕事ですっかり遅くなって、辺りは既に暗い。早く帰りたいのに、この雨じゃ歩けないよ……。

やむまで気長に待つか、と私は空を見上げた。

その時、雨雲の割れ目に、流れ星が消えていった。

——私は、昔から流れ星が嫌いだ。

輝いて、一生懸命輝いているのに、その輝きは月なんかには比べたら微弱なもの。それに加えて、すぐに散ってしまう。

何だか、人の恋みたいで、好きになれなかった。

「なーに堅い顔造ってるんだ」

突然、店から一人の少年が出てきた。

見覚えのある顔——同じクラスで幼馴染の恭介君だった。

「流れ星があつて、ね」

「お前、昔から流れ星嫌いだったよな」

人ごとみたいに笑う恭介君。そりゃあ流れ星が嫌いな人間なんて、私だけだろうけど。

「——ちよつと目瞑つてみ」

「え？」

「いいから」

言われるまま、私は目を瞑る。

直後、額に何かの感触が走った。

慌てて目を開けると、そこにはおかしそくに笑う恭介君が、鏡をこちらに突き出していた。

鏡に映った私の額には、一つの歪な星が、ボールペンの頼りないインクで書かれていた。

「ボールペンで書かれた星は消えない。そうだろう」
言い終えぬうちに、恭介君は私と唇を重ねた。

——消えない恋もあるってことを、私は知った。恭介君と、消えない恋を築いていこう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2794g/>

消えない流れ星

2010年10月28日07時36分発行